

占領期・50年代ソビエト映画紹介者としての土方敬太

吉田則昭

本論文では、演出家・土方与志の長男として、戦前にモスクワで暮らしたロシア語話者であった土方敬太の戦後の活動を、特にソビエト映画の紹介者としての側面から取り上げた。

土方は、1949年からソビエト映画配給会社の北星商事に勤務、1950年には同社から発行された雑誌『ソヴェト映画』の発行にも関わった。本論文では、戦後、土方敬太がソビエト映画紹介者として果たしてきた役割を、三点指摘した。

第一に、占領期にソビエト映画配給で、北星商事が占める位置づけが変化していったことには、土方敬太が関与した点が大きかった。また、北星商事では『ソヴェト映画』の発行に携わり、ソビエト映画の宣伝・普及を積極的行なった。

第二に、土方はソビエト映画ジャンルの枠組を提示し、一般観衆の理解に資してきた。しかし、戦後はイデオロギー色が少ないとみられたソビエト映画の「劇映画」ばかりが日本での上映を許可された。

第三に、日本政府による映画輸入クォーター制の下、1950年代以降もソビエト映画の輸入割当は拡大しなかったため、自主上映運動を『ソヴェト映画』誌上で訴え続けた。そうした活動は、60年代以降のソビエト映画紹介へとつながった。